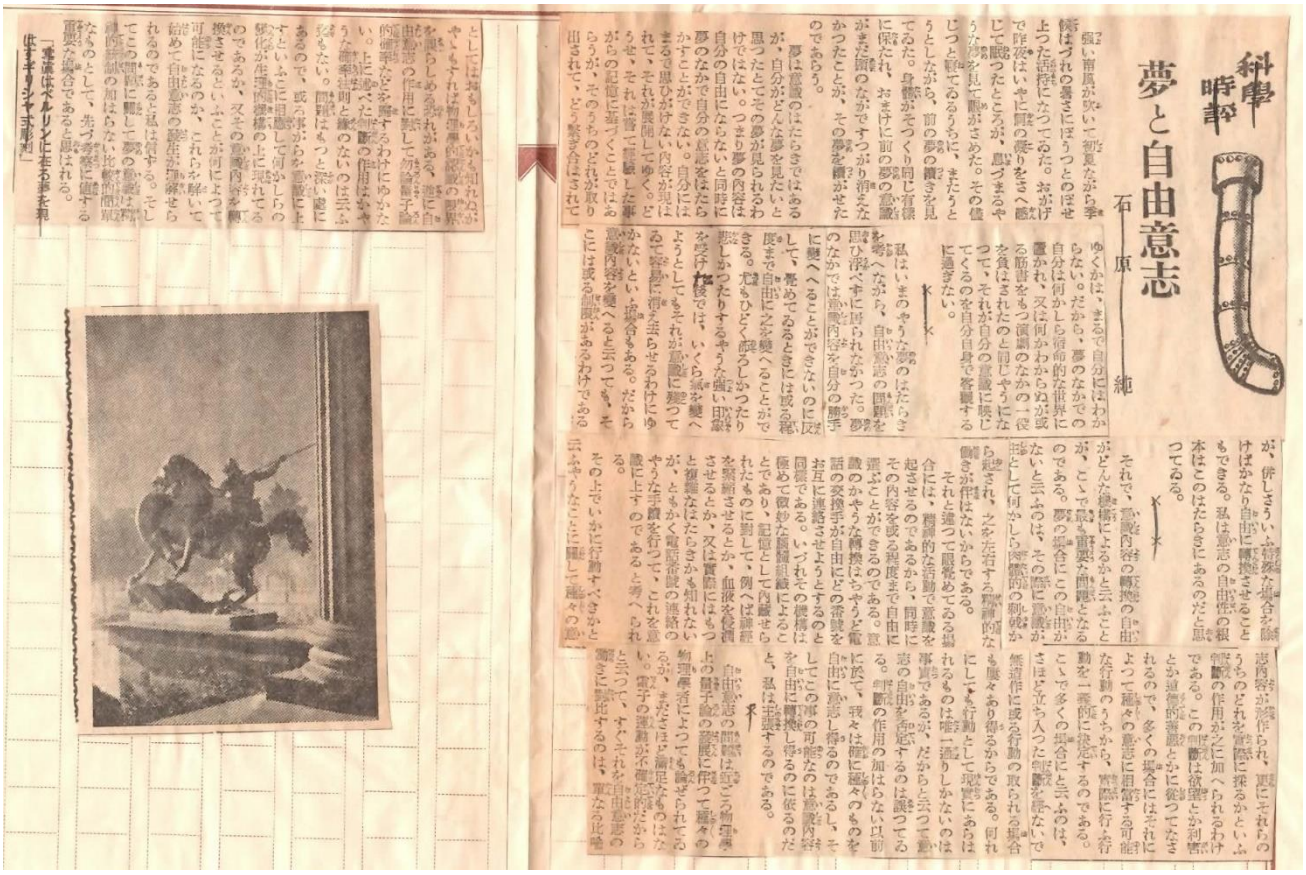
1936(昭和 11)年の新聞記事

4 月 19 日　　東京朝日新聞

5 月 10 日　　帝国大学新聞



5 月 20 日　　東京朝日新聞

綠 (33)

片岡鐵兵

畫富永謙太郎

科學とジーナリズム (1)

石原純

大森・尾崎の問答

「何故、文學者の行動が文學に現れ、文學に遡らなければならぬのか、その理由がわからない」といふ大森義太郎の問に對して、尾崎士郎は「文學に現れ、文學に遡れといふのだ。政治の低俗性と政治家の大衆性を否定するところに一つの機械的要素があるとは知るが、今日では一應正しく文學者は文學者としての矜持を持つて政治的であると解明するに至つて居るのだ。それは當然な分野であつて、決して政治と分離することではなく、良きプロ文學をたることによりよきプロ政治と肇仕

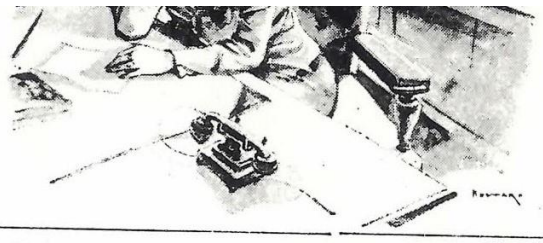
科學とジーナリズム (2)

石原純

「ハメリンの笛吹き」

六百五十年祭

5 月 25 日　　東京朝日新聞



科學とジャーナリズム (3)

石原純

現在ではジャーナリズムの價値が科學者の間にも多少とも認められ出したのは事實であり、そして實際に多數の科學者がこれがために動員せられつゝある。ジャーナリズムは實に偉大なものとして卑下すべきではなく、それの健全な發達は社會にとつては極めて有意義のものである。他方で科學者の側から見るならば、その專門的研究は固より彼等の重大な本務であるに相違ないが、それもはや當時の學究的態度を保守し、徒らに自ら高しとするやうな傾向に陷つてはならない。近頃では顧みられないやうになつたが、科學者は常に廣く社會に對する責任を感じ、自己の發見や發明が社會にどのやうな影響を與へるかを考慮しなければならない。從來の如くジャーナリストが科學への極端な無知を暴露して科學者の不信用を買ひ、また社會にでたらめを傳へるが如き自己の職責を怠るものであることを深く自覺せねばならない。他方で科學者が徒らに社會から敬重される態度を待つことによつて社會に對する彼等の義務を忘却するのは却て科學それ自身を死物化せしめるものであるといはねばならない。そしてかやうにして始めてそこに科學者とジャーナリストとの、より健全な提携が期待せられるのであらう。(了)

夜空の一光

サイエンス

月のない夜空がほんのりと明るいのは果して星の光のためだらうか。最近アランス、リョン大學ジョルジュ・デジャルダン教授が、分光寫眞器によつて研究した結果、その僅に五分の一が、星自身から來たもので、他の大部分はつまり前に二種の道程で、太陽から來たものであることが判つた。

(一)既に西山に沒した太陽から、すばらしい速力で射出された電子が、地球の磁場で曲げられて、太陽のゐない夜の空に、発と同じ分量だけ注ぐ。これが、美しい北極光ができると同じ原理で、夜空の輝光を生ずるのである。

(二)月光が太陽光線の反射であると同じやうに、夜光の一部分は、太陽光線が空氣の各層中に浮遊する物質の小片にぶつかつて、そこから反射されたものである。デ敦授の夜光分光寫眞には、酸素と窒素が夥しく現れて居り、また水蒸氣やアルゴンも顔を出してゐる。

從來夜間空の最上端には、水素やヘリウムの如き非常に輕い氣體だけしかないと思はれてゐたが、酸素や窒素も、やはり、そこまで及んでゐることが判つた。

▽電氣學會東京支部講演會　廿八日　芝六時、有樂町電氣倶樂部講堂
▽日本英文學會第八回大會　卅一日宮城女子專門學校に開催、出席申込は東北帝大法文學部英文學研究室へ
▽本多清三氏　廣下武藏野町市寧寺　一八一三に轉

る靜物〃

☆小出楢重畫集

多くのデッサンを中心にした遺作展覽會が、……に於て催されてゐる。その感を深くした。

それといふのが見受けられるからである。作品に通じて、一種の靜寂さが漂ひ、觀る者の心を引きつけるものがある。

閑歩』

齋藤茂吉

フウゴオフオン・ホフマンスタアルが女子の死の一文の題は、誰に何とも云へぬ佳題で、一寸したういふものを書いてゐるふにも、かう浮ぶるあると同じやうに、夜光の一部分は、太陽光線が空氣の各層中に浮遊する物質の小片にぶつかつて、そこから反射されたものである。デ敦授の夜光分光寫眞には、酸素と窒素が夥しく現れて居り、また水蒸氣やアルゴンも顔を出してゐる。

從來夜間空の最上端には、水素やヘリウムの如き非常に輕い氣體だけしかないと思はれてゐたが、酸素や窒素も、やはり、そこまで及んでゐることが判つた。

▽電氣學會東京支部講演會　廿八日　芝六時、有樂町電氣倶樂部講堂
▽日本英文學會第八回大會　卅一日宮城女子專門學校に開催、出席申込は東北帝大法文學部英文學研究室へ
▽本多清三氏　廣下武藏野町市寧寺　一八一三に轉

9 月 14 日　　東京朝日新聞

『科學と文學』

岡邦雄氏著

石原純

本書の著者岡邦雄氏はもと物理學を專攻した人であるが、それ以上にマルクシズムの唯物論者としての立場をもつて居り、近ごろでは專らその立場から純々の社會的事象についての論評を行ひ、獨自な論調をもつて讀者の注意を惹いてゐる。本書はそれらの論評の中から、文學に關聯してゐるものを選んで一冊に纏めたものである。

著者が自己の立場を明瞭にしてゐるものだけに、讀者にも科學と文學とに對する態度がはつきり